

2023年12月3日

説教『イエスの時が来る』

高橋克樹牧師

聖書 イザヤ書52章1〜10節、ヨハネ福音書7章25〜31節

ヨハネ福音書7章25節から29節では、エルサレムにいる人たちが次のように言ったとあります。「これは、人々を殺そうとねらっている者ではないか。あんなに公然と話しているのに、何も言われない。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めただけはなかるうか。しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ」(27節)と言ったのでした。

仮庵の祭りも半ばになったころ、主イエスがエルサレム神殿内で教えられていたのですが、ユダヤ人たちは、その教えに驚いたのです。「この人は律法学者から正規に学んでいないのに、どうして聖書のことをこれほど詳しく知っているのか」と驚いていたのです。しかし、彼らはそれを打ち消すように言います。『わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ』(27〜28節)と言って、イエスがキリストだということを否定したのです。彼らも、イエスの教えの内容を聞いて、もしかしたらこの人がキリストではないかと思ったのです。けれども、すぐにそれを否定したのです。なぜなら、彼らはイエスがどこの出身かを知っていたからです。彼らは、イエスがどこの出身か知っていたので主イエスが神から遣わされた方だということなど想像もできないのです。イエスはガリラヤのナザレ出身で大工の仕事をしていました。旧約聖書によれば、キリストはナザレから出るのではなく、ユダヤのベツレヘムから出ることが預言されているのです。

けれども、イエスがベツレヘムで生まれたことを知らないし、またダビデの家系であることも知らないのです。ユダヤ人たちはイエスがキリスト(救い主)であるとは、ナザレ出身の大工がまさかキリスト(救い主)であろうとは思わないのです。

すると、神殿の境内で教えられていたイエスのはつきりと言います。確かに、あなたたちは私の出身地を知っていることは承知しているけれども、『私は自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである』(28〜29節)と大声で言ったのでした。イエスはここで、自分が神のもとから遣わされた者であることを明確に話しているのですが、ユダヤ人たちはイエスを神から遣わされたメシアだと受け止めることができなかったのです。ところが、ユダヤ人たちはイエスを捕えようとしたのですが、誰も、実際にイエスの手をかける者はいなかったのです。おそらく、イエスがメシアであることは頭では否定しているのですが、もしかしたら、イエスがキリストであるかもしれないという思いもあったのでしょうか。いずれにせよ、イエスを捕縛する人は出てこなかったのです。その理由が30節後半にあるように、『イエスの時がまだ来ていなかったからである』と語られているのです。

「イエスの時」とはイエスが十字架につけられる時のことです。すべての人間のため

に永遠の贖いの死を遂げられた時のことです。十字架の贖いの時がまだ来ていないのです。その時がまだ来ていなかったのも、誰もイエスを捕縛する者が現れなかったのです。つまり、すべてを支配して人間を救おうとする神の

の意志がそこに表されているのです。イエスの出身を知っていたことで、ユダヤ人たちが議員たちはイエスをキリストとして受け入れることができなかったのです。

どうしてか。それは旧約聖書の預言でメシアが来ることは知っていたのですが、神の最終的な意思がどこにあるのかを知らなかったのです。

神の意志がどのように自分の人生を舞台にして御業を働かせているのかを私たちは知る必要があります。イエスはそのことに早い段階で気づかれていたと思います。イエスの立ち居振る舞いを見ると、神の御旨を自分の行動や発言において現わしていることがわかります。旧約で預言されているメシアは、ユダヤ人にとっては実現可能な預言ですが、自分の人生に神の意志がどのように表されているかを考えることに乏しかったのです。ですから、他力本願的にユダヤ人という民族の上に神の祝福がもたらされると考えていたのです。決して、自分の人生という舞台を用いて神が御業を働かせるとは考えなかったのです。自分の人生は自分のものだから、自分の思い通りにすることができると考えている限り、神の御業に気づくことはできません。

イエスの十字架の贖いによつて、最終的に私たち人間は贖われたのですが、依然として課題はあり続けているのです。十字架の贖いを真実自分のものにするためには、たとえ自分の人生が祝福を受けていないように思われる事態に陥っていたとしても、そこにどのような神の意志があったのかを見極めることができます。

神の祝福はいつも自分の思い通りになる結果がもたらされることではありません。イエスが生きておられた時、神の意志がユダヤ人たちに現わされていなかったのは、イエスが神の御旨を現わすために、イエスの業を通して体の不自由な人たちを癒したことに端的に表されています。このイエスの癒しの御業をただ単にイエスの力によるものだと考えてしまうと、神の御旨を考えない人間の浅はかさが現わされているのです。イエスは十字架上に賭けられることをも神の意志として受け止めたように、私たちは自分の人生に立ち現れた不幸な事態の背後に、何らかの神の意志が現わされていることを覚えたいものです。不幸な事態を神はもたらすことに、神の御旨があるわけではなく、不幸な出来事の中から神に向かって勇気をもって歩み出すことができるように導いておられるのです。祝福を受けていないように思える時、私たち信者は立ち止まって、神の御旨を自分にとって思い通りにならないように思える時、私たち信者は立ち止まって、神の御旨を自分にとってのかを見極めたいと思います。

ヨハネ福音書7章で言われている「イエスの時はまだ来ていなかった」とあるのは、直接的には十字架の贖いの時がまだ来ていないことを言い表したのですが、現代に生きる私たち信仰者の視点から見れば、イエスの十字架の贖いを既に受けた者だからこそ、贖われた私たちの人生に神がどのような御業を成しておられるのかを見出し、その神の御旨の中を歩んでいく一人ひとりとなりたいたいものです。